体制転換・歴史的記憶・エスニックアイデンティティ

ブリギタ・ゼパ

本稿は、体制転換後のラトヴィアにおける歴史的記憶とエスニック・アイデンティティとのあいだの関係を理解しようとするものである。

最初に、「集合的記憶」という用語の解釈を簡単に検討したい。「集合的記憶」という用語は、フランスの学者モーリス・アルブヴァクスによって鋳造されたものであるが、この現象の研究が実際に始まったのは、エミール・デュルケイムが、社会的コミュニティの登場する際の宗教儀式の役割を検討し始めた時のことであった。これら二人の学者は、集合的記憶という概念によって社会的次元を浮き彫りにする伝統を確立したのである。集合的記憶は、社会環境と個人とのあいだの相互作用の結果としてみなされる。20世紀後半に集合的記憶の研究は、いわゆる相互作用論者らによる補完を受けている。これは、集合的記憶を個人と社会的エージェントとのあいだの相互作用過程として説明する専門家たちである。集合的記憶についてのもっと最近の説明は構築主義によって与えられているが、これは、集合的記憶を様々の社会的エージェントの利害や価値観の影響下で創造される社会的構築物とみなしている。近年、研究者たちは言説分析にも焦点化してきたが、これは、集合的記憶を構築する際の権力構造の側面を強調するものである。

次に、集合的記憶の経験的研究と解釈研究を提示して、集合的記憶とアイデンティティ構築の諸側面、つまり第一に集合的記憶構築過程への新聞の影響、第二にマスメディアにおける祝祭日言説、第三に国民の祝日と歴史的記憶、そして最後にラトヴィア人とロシア人とのあいだの体制転換に関する解釈の調査結果について分析してみたい。

ラトヴィアのラトヴィア語マスメディアおよびロシア語マスメディアの分析から示されるのは、以下のようなことである。すなわち、一方で、それらが集合的アイデンティティ形成のきわめて積極的なエージェントでありながら、他方で、それぞれ異なる仕方で歴史を解釈している。すなわち、歴史上の異なる局面に注意を焦点化し、異なった集合的記憶を構築し、そうすることでそれぞれの対象とする視聴者がアイデンティティを構築する一助ともなっている。例えば、ラトヴィア的アイデンティティを

構築するということは、戦前のラトヴィア共和国との結合を活性化させるということである。第一共和国は、全般的成長の時代、すなわちラトヴィアが経済その他の領域で多大の達成をとげた時代として、おおいに理想化されたかたちで提示されている。

他方、ロシア語新聞のなかでロシア語話者住民は、ラトヴィア人のナショナリズムの成長に対抗する国際主義者として描かれる。ロシア語話者は、民族的出自によって人々を選別したりはしない、と強調されている。ロシア語新聞は、読者を素朴で勤勉な人々として示すことが多い。戦時の兵役経験者や労働の場で豊富な経験を備えた人々が比較的よく言及されるが、彼らの実際の過程についての感じ方が描き出される。ロシア語新聞では執筆者らが民族間緊張悪化は避けがたいと予言したが、「国民的調和」という観念について書くことのほうがはるかに多いし、公共の平和を維持する際のその重要性を強調している。こうした新聞は、独立過程以前［ペレストロイカ期以前］の社会で諸要素間に存在した友好的で好意的な関係を強調し始めていた。

最後に、一般的議論を示すこととしたい。ここでは、ラトヴィア人のアイデンティティ構築とロシア人のそれとのあいだの差異を説明するために、マニュエル・カステルのアイデンティティ構築理論を援用したい。カステルは、異なる二種類のアイデンティティを区別する試みを行ったが、彼の思考は、権力や統治制度の採用する立場に沿った場合のアイデンティティ構築の広がり、あるいは、抵抗や異議申し立ての一形式としてアイデンティティが登場する際のあり方、といったものに依拠している。カステルは「正統化アイデンティティ」と「抵抗アイデンティティ」について論じている。彼は前者を「複数の社会的アクターに自分たちの支配を及ぼし、合理化するために、支配的社会制度によって導入されるもの」と定義している。この見方からすると、正統化アイデンティティは、民族的ラトヴィア人のナショナル・アイデンティティ構築をたいへんよく言い当てている。市民社会は、一方できわめて積極的かつ敏感にナショナル・アイデンティティを構築するが、他方で同時に、国家権力を合理化し強化するのである。

民族的ロシア人の集合的記憶は、ラトヴィア人とは対照的に、別の記憶に有機的に根ざしている。ラトヴィアに暮らすロシア人は、自分たちの集合的記憶を「歴史の回復」と戦間期に焦点化するのを好むラトヴィア人のそれに対立させることによって、自分たちのアイデンティティを形成している。異なる歴史的記憶間の対立に依拠して構築されるのは、いったいどのような類のアイデンティティなのであろうか。カステルにしたがってここでは、抵抗アイデンティティについて語りうる。カステルはそれを次のように捉えている。すなわち、「支配の論理によって価値下落および／あるいはスティグマ化させられた地位／状況のなかにおり、それゆえ社会諸制度に浸透して

いるのとは異なり、あるいはこれに対立する原理に基づいて、抵抗と生き残りのアイデンティティを構築しているアクターによって産み出された」[1]もの、である。

さらにここでは、歴史的記憶と民主主義的価値とのあいだの関係についても議論したい。集合的記憶は、ある種の記憶を強調し、他は忘却するようにしむける、ある種のフィルターとして作動する。ラトヴィアの歴史家たちはラトヴィアの第一次独立時代を民主主義期と権威主義体制期とに厳密に区分してきたが、こうした事実にもかかわらず、公共空間にはラトヴィアの第一次独立時代を一つのまとまりとして定義しようとする言明・記号・シンボル・問い直しが存在してきた。権威主義体制期の価値観や理想が戦間期全体に合致するものとして語られている。「ラトヴィア人のラトヴィア」というスローガンは、1934年の［ウルマニスによる］クーデター以降に人気を博したものだが、今日では、急進ナショナリストだけではなくて、多様な組織の人々からしばしば賛美されている。歴史の大衆化をめざす人々は、戦間期を「ウルマニス時代」として言及することが多い。政治家もまた、歴史上の民主主義期と権威主義体制期との違いにしばしば無頓着である。

ラトヴィア政治の民主主義期と権威主義体制期とを区別し、民主主義期の達成を強調し、二つの時期のあいだの価値の相違を評価しようとする議論は、公共空間にはまったく存在しない。集合的記憶は、「強い指導者」の手で達成された経済成長、国民的価値、人民の統一とラトヴィアのイメージとの相互連関を構築している。ウルマニス体制が民主主義的諸価値を破壊したという事実にもかかわらず、この思考法では民主主義期は無視される。

傑出したラトヴィア人歴史家であるエドガルス・アンデルソンスは、民主主義とナショナリズムがバルト諸国の二つの重要な次元であった、と結論づける。「バルト諸国は、ナショナリズムと民主主義の記号のもとに創造された。しかしながら、バルトの人々は間もなく、ナショナリズムと民主主義は建設力であるだけでなく、破壊の源泉であることも学んだ。」[2]現実には、第一次世界大戦後のラトヴィアの政治システムはきわめて多くの多様な政党を持ち、このことが民主主義の権威を傷つけるのに一役買った。ナショナリズムのスローガンは権威主義への道を舗装するのに使われた。民主主義とナショナリズムとのあいだのバランスは、いまもラトヴィア政治のきわめて重要な問題である。

ラトヴィア語話者とロシア語話者の集合的記憶の構築に際して異なる社会的アクターがきわめて影響力を有している。ここで特に重要なのは、ロシア語マスメディアとラトヴィア語マスメディアである。その結果、ラトヴィア人のあいだで構築される記憶とロシア人のそれとが対極的記憶をなし、それが対極的アイデンティティの基礎とし

ても機能している。ラトヴィア人のアイデンティティは正統化アイデンティティとして生起し、ロシア人のそれは、より典型的に抵抗的アイデンティティなのである。1990年代初頭に実施された調査ともっと最近に行われた調査は、相異なる集合的記憶の構築がまさに今現在も継続していることを示している。これはまた、国民的祝日の祝いが表現される仕方の点でも、ロシア語マスメディアとラトヴィア語マスメディアで提供される歴史的メッセージの違いという点でも、確認されている。

歴史的記憶の構築は、特定の価値観を強調し、他のものを隠蔽することと関連している。たとえば、ラトヴィア人の歴史的記憶は、典型的に、カールリス・ウルマニスの人柄と彼が確立したナショナリズムを強調する。つまり、この国の民主主義期に民主主義的価値を実現するためになされたラトヴィアの成果には、さほど注意が払われていない。価値におけるこのバランスを欠いた状況は、現在のラトヴィアでも確認できる。一方での「強い指導者」にたいするより大きな信頼が、他方でのさまざまの事柄に及ぼす民主主義的で市民的な力の可能性への信頼の不十分さとともに、存在し続けている。歴史的記憶の構築は、ラトヴィアにおける民主主義とナショナリズムとのあいだのバランスへの攻撃を助長しかねない潜在的可能性を与えている。

（橋本伸也訳）

〈註〉

1 Castells, M.（2004）. *The Power of Identity: The Information Age: Economy, Society and Culture*, Vol.II, Wiley-Blackwell, 2nd ed., p. 8.

2 Andersons, E.（1982）. *Latvijas vēsture 1920.-1940.*（*History of Latvia, 1920-1940*）. Daugava.